［STEP　2］　～札を覚えよう（その1）～

《むすめふさほせ》

さて、あなたの前には詠札百枚と取札百枚がある。この中から次の札を選び出してほしい。まず、詠札百枚の中から、歌の一番最初の音（字）が「む」で始まる札を探してみよう（詠札には歌の作者の名前が記されているが、それと間違えないよう注意すること）。見つかっただろうか。一枚しか見つからなかったことと思う（もしも、二枚以上見つかったら、それは不良品である。購入先に文句を言って交換してもらうこと）。同様に「す」で始まる札、「め」で始まる札、「ふ」で始まる札、「さ」で始まる札、「ほ」で始まる札、「せ」で始まる札を探してほしい。それぞれ一枚ずつ見つかる筈である。

次に、今見つけ出した七枚の詠札に対応する取札を探し出してほしい。これは詠札の五・七・五・七・七の七・七（下の句）の部分の文字が並んでいる取札を見つければよい。

さあ、間違えずに探し出せたであろうか。さて、詠札・取札合わせて十四枚が見つかったら、対応する札をペアにして並べてみよう。そして、取札を見て詠札の歌が空んじられるようになればよいわけだが、何も歌を全部覚える必要はないのである。

今、詠札を探した時、「む・す・め・ふ・さ・ほ・せ」のそれぞれの音（字）で始まる札は一枚しかなかった。すなわち、このことは今の七つの音に関しては、一番最初の音だけで、それに対応する取札一枚が決まってしまうということである。ゆえにこの文字を「決まり字」といい、「む・す・め・ふ・さ・ほ・せ」の音で始まる札を「一字決まり」の札という。「一字決まり」は「むすめふさほせ」と覚える。語呂もよく、古来からこのように覚えられてきたのであるから。

この「む・す・め・ふ・さ・ほ・せ」の七枚の札は、一音（一字）で取ってもかまわないという特徴をもっており、これはゲーム中のどの時点で詠まれても一音（一字）で取れるのである（この特徴は、これから覚える他の札と比較してみるとより理解できると思う）。

では、本ステップの仕上げといこう。取札七枚をそれぞれ「これは、む」「これは、す」「これは、め」……と言えることができるように覚えたであろうか。もう一度、取札七枚を集めてシャッフル（きること）し、一枚ずつ決まり字を言ってみよう。間違えずに

言えたであろうか。間違えたら、何度でもやり直そう。全部正解が言えたなら、次のステップに進もう。

決まり字・下の句対照表

（むすめふさほせ）

「む」…きりたちのほるあきのゆふくれ
「す」…ゆめのかよひちひとめよくらむ
「め」…くもかくれにしよはのつきかな
「ふ」…むへやまかせをあらしといふらむ
「さ」…いつこもおなしあきのゆふくれ
「ほ」…たたありあけのつきそのこれる
「せ」…われてもすえにあはむとそおもふ
㊟　…　百人一首の取札には、濁点は付されていないので注意すること。

札　音　（1）

各ステップ毎にページを換えていくとどうしても余白が出てしまう。余白を余白のままにしておいても、余白の効用があるだろうが、これも性格なのだろうか、何かで埋めたくなってしまう。イラストでも描ければ良いのだが、そういう才能もない。このようなわけで、今後あまりにも余白が目立つところには、この「札音」という欄で、本文とはたいして関係ないことを書こうと思う。札の暗記に疲れたときにでも、「ちょっと一息」のつもりで読んでほしい。

さて、何故に「札音」というタイトルなのであろうか。「球音」というと普通の人が野球をイメージするように、競技かるたをイメージする音は何かを考えてみた。やはり「札」を使う競技であるから「札音」が良かろうという、単純なネーミングである（「サツ・オト」と読まれると札束を数える音のように思われるので「フダオト」と読んでもらいたい）。

是非、舞い散る札の音を聞いていただきたいと願っている。

札　音